

娘よ、またな！

目次

- 一、 プロローグ
- 二、 生母のこと
- 三、 継母のこと
- 四、 学生時代
- 五、 大阪
- 六、 娘の誕生
- 七、 ヒューストン
- 八、 娘の学生時代
- 九、 娘の社会人時代
- 十、 娘よ、またな！

一、プロローグ

東日本大震災発生から十年目の日、テレビのニュース中継を観ていると、インタビューを受けた東北の中年男性が指を四本立てて泣き崩れた。

彼の家の津波犠牲者が、母と妻と小学生の子供二人の四人ということだった。私は可哀想で同情してもらい泣きした。そんな不幸が起こったなんて酷過ぎる。涙もろい私であるが、男性の心情を思うともらい泣きして余りあった。

そして自分のことを顧みた。

私は八才の時、三十二才の母を病気で亡くすという大きな悲劇を経験した。二十五才で結婚して、元気な息子と娘に恵まれ、幸せな家庭生活を送ってきた。二人とも結婚して、息子には三人の子供ができ、私達夫婦はその孫達と遊ぶのが昨今の無上の喜びであった。

しかしまさか、あの大きな悲劇が襲って来ようとは・・・

二、生母のこと

母は昭和元年寅年の生まれだった。大正が終わったその年の昭和になってからの生まれであったので、母は『昭和元年生まれ』に拘っていた。女らしく歳のことを気にしているな、と子供ながらに私は思った。今、その昭和元年を調べてみると、十二月二十五日から三十一日までの一週間しかないのです、極めて貴重な年である。それだから母は『昭和元年生まれ』を強調していたのだ。

父は太平洋戦争を中国で戦い、終戦と同時にシベリアに抑留されて、生死不明だったが、四年後やっと山梨に帰って来た。シベリア抑留の元日本人兵は、果たして生きているのかどうかがよく分からず、両親は心配していた。生死不明だから次男に農業を継がせることを真剣に考えていたらしい。

それでもある日突然父が帰って来た。祖母はやっていた家内の作業を放り出して、裸足で外に飛び出し、「タケシー！」と父の名を叫んで首に抱きついて号泣したらしい。これは偶々その場に居合わせた私より十才ほど年上の従兄から聞いた話であるが、ドラマで見るとような光景である。祖母の心情がよく分かる。

若くして徴兵された父ももう三十才直前になり、早々に隣の郡の母との縁談により、小作農上がりの山田家に嫁いでもらった。そして間もなく昭和二十五年、私が長男として誕生した。

祖父母は仲が良く、二人とも実直な性格で働き者だった。子供は六人に恵まれたが、娘一人は早世していた。あとの娘三人は都

会に嫁がせた。小作農として百姓の苦勞を味わっていたから、百姓以外に嫁がせたのだろう。

母はめっぼう気が強いので、姑（祖母）と折り合いが悪く、「五黄の寅（気が強いことの代名詞らしい）だから」と陰で揶揄されていたことを私は憶えている。でも昭和元年は調べると五黄の寅ではない。昭和二十五年寅年生まれの方が五黄の寅だった。母と違って気が弱いのに・・・。

母は厳格で几帳面で物知りで働き者であった。子供の私でも素直にそう思った。私の叔母達も「春美（母）さんには色々教えてもらったのよ」と言っていた。毎日家の内外を掃除して片付けるからいつもキレイでキッチンと整頓されていた。

但し、厳格さが行き過ぎていて、率直で直情的でもあり、ピリピリした雰囲気を持っていた。母は農業と家事に忙しくもあったので、私は祖母に育てられた「おばあちゃん子」であった。

母は、私が小学校に上がって、学校から帰って来ると先ず宿題を済まさないと遊びに行くのを許さなかった。純農村地帯の近所にそんな家はどこにもなかった。小学校一年生の私でも分かる世間と違う異常さだった。友達が遊びに来ているのに、宿題を済ますまでダメだった。教育だったのか？躰だったのか？

また、夕方になると家中の雨戸を閉める手伝いを私に課した。養蚕をやっていた大きな家には雨戸が多かった。薄暗い所が恐か

った弱虫の私は、いつも何かお化けでも出て来るようで大急ぎでやっていた。

何事にも厳格な母は私と二つ下の弟を叱ることも容赦なかった。言う事を聞かずに駄々をこねていたりすると、真つ暗な押し入れに押し込まれて手で戸を押さえられた。それでも、私が押し入れに入れられた時、弟が「可哀想だから出してやって」と庇うと、「兄弟思いは良い事だ」と褒めて出してくれたことがあった。

我々兄弟は母に優しくされた記憶は殆んど無いが、それは『躰第一』の方針であったからなのだろう。

母は勝気だから、運動会の競技にも積極的に参加していた。あの時リレー競争に出場して走っていたが、バトンを渡す直前に転んでしまい、そのままバトンを投げて渡した。気持ちには分かるが違反である。チームが失格になってしまったて悔しがっていた。でも自分の失敗を笑って言い訳は言うものの、自分にも厳格で正義感が強いから、反省はしているようだった。

ある冬の日、私は母に理由は忘れたが大層叱られた。私はふくれて一人炬燵に潜り込んで「バカカカア死んじめえ」と言っけて気を紛らわした。こういうことは時々あった。でもその時、母には悲しい運命が待っているとは夢にも思わなかった。

私の目撃の範囲では、原因は知らないが母は父と大きく衝突したことが一度あった。戦地やシベリアで過酷な中を生き抜いてきた父は、普段温厚だが、その時は一線を越えてビンタが飛んだ。

自己主張の強い母も憤怒を抑えられないようだったが、暴力では勝ち目はない。

そこで母は裏の畑へ行って、怒気を込めて悔し泣きしながら、立ちカンナで雑草を根こそぎ取りだした。母らしい極めて前向きな憤怒の昇華方法だった。

母は健康そのものに見えたが、三十そこそこで乳癌が発見された。そして右乳房を手術で切除した。それから暫くは普通に農業や家事をこなしていた。

父は母の家事軽減（癌手術による右手のハンデ軽減）のため、電気洗濯機を購入した。近所では真っ先の導入であり、近所のおばさん達がどんな物か見に来たほどであった。

母と一緒に風呂に入ると、母はケロイドの大きい手術跡を気にすることもなく私に見せた。子供心ながら、どんな目に遭ったのだろうと母が可哀想に思えた。

しかしながら母は、三十一、二で頭痛を訴えるようになった。

検査の結果、癌の脳への転移が確認された。

何という悲劇だ。当時脳癌の外科手術は「難しい」ということだったし、健康保険もない時代に多大な費用負担は農家には事実上不可能だった。母もそのことは納得した。

脳癌は誰でも罹ったら諦めざるを得ない不治の病だった。子供の私でも深刻で絶体絶命の死の病であることは想像できた。稀有の癌である脳癌、私はその病名に一生嫌悪感を持つことになり、脳癌を憎み、その病名を口にするには殆んどない。

母は、甲府の大病院に入院して薬物治療をして、少し症状が改善されると、喜んで希望を見出すこともあった。しかし癌は怖い、ましてや脳癌をや、である。

母は「助からない」ということで病院から自宅に帰された。頭痛がするから鎮痛剤のようなものは飲んでいても苦しそうだった。

そして死期を悟った時、私を枕元へ呼んで、「お母さんはもう長くない、お父さんの言う事をよく聞いて、おまん（お前の意）は長男だから弟と妹の面倒をよく見るように」と言った。

そして「新しいお母さんが来たら仲良くするように」とも言った。この母から「新しいお母さん」という言葉が出たことに私は心の中で驚愕し、母は亡くなって行くのだと思わざるを得なかった。お母さんはこのお母さんだけなのに、と思った。

八才の私には酷な言葉だったが、母としては残す長男にどうしても言っておきたかった事であったのだろう。

私は薬や神仏が母を助けてくれて奇跡が起こらないだろうか、と願ったが、何日もしない内に医者から「今夜が峠です」と告げられ、その通りその夜にはあの世へ旅立った。享年三十二才だった。私は八才、弟は六才、妹は三才だった。母の命日は奇しくも私の誕生日の前日だった。

妹は母の記憶は殆んど無いらしいが、母としては三番目に女の子が生まれてきて大いに喜んで可愛がっていた。

あの強気な性格の母にとって、あの若さで小さい子供達を残して旅立たざるをえなかったのは何とも無念で、さぞ心残りのことだっただろう。心情を察して余りある。

私は母の足に触ってみた。素足で硬くて冷たかった。母の死を肌で感じた。

私が三才の頃、曾祖父の死は経験していて、記憶にもあるが、若い母の死は何とも悲しく、残された我々家族はどうなってしまうのだろうかと不安だった。

母の葬儀には担任の先生とクラス全員が来てくれた。私は母親を亡くした、という級友とは決定的に違う同情を受ける側の境遇に強い劣等感を覚え、皆と会うのが嫌だった。今後この劣等感をずっと背負って行くのだな、と思うと憂鬱になった。学校の同級生（小三）にも親を亡くした者など思い当たらなかった。

でも一人だけ同じ地区に小さい時に両親共を事故で亡くして、祖母に育てられている友達がいた。私は彼のことは極めて特異に感じていた。私の母も彼には特に優しく接したので、彼は私の母に親しみを感じているようだった。その友達には今まで以上の同情を感じるようになった。

私達兄妹三人も周りから特殊な目で見られるのだろうか、変な自意識が湧いてきて、その境遇が無性に嫌だった。事実、一年後くらいに、隣のおばさんが私達のことを、「親は無くとも子は育つ」と言ったことが聞こえた。その時には継母が既にいたのに、である。私はだんだん自意識過剰な子供になって行った。母とい

う最も身近な存在を早くにして亡くしてしまった私達子供三人は、とんでもない境遇に陥っているのだなと思った。

私にとって八才で思い知らされた母親の死は一生のトラウマのようなものになってしまった。母の日のカーネーションにわだかまりを常に感じ、『母の歌』みたいなものは歌えなかった。母親があんなに早く死ななかつたら、私は間違いなくもつと明るい性格でいられただろう。

父親や祖父母は物心が完全に付いている私に特に気を使ってくれているのは分かっていたが、母の立場の愛情、あの厳しかった愛情とは程遠いものだった。今となってはあの愛情が懐かしく感じた。子を思う厳しさだった、と思えた。母とはたった八年の短い付き合いだった。母の闘病期間もあるので、全く短く、私から何かして上げたような事も全く無いまま亡くなっていった。写真も殆んど無い、遺品も無い。でもあの性格の多くを私は受け継いでいると自覚している。気丈さ以外の、几帳面さや、厳格さ、正義感である。・・・いいところ取り過ぎるか？

私達兄妹三人は性格が大いに違う。性格の違う両親やその祖先から色々な面を混ぜてバラバラに受け継いでいるからそうなる。遺伝とは面白く興味深い。

三、継母のこと

農業と家事の大きな担い手を亡くして、父は早く再婚する必要があった。母の病気が絶望的になった時点でその事は考えていたはずだ。周りから意外に早く再婚相手の推薦がいくつか来たらしい。父としては私達子供三人の意向も気になるようだったので、二人ほどとお見合いをして、二人を私達にも会わせた。勿論、相手に対してはその必要はあった。

結局、より健康そうな方の人を選んで、結婚することになった。もとより私が意見を言うことはなかったが、もう一人の人にも私は親しみを感じた。

新しいお母さんは再婚で温厚で、私達子供三人にも姑にも優しくかった。また働き者で仕事が早かった。私は小さい頃から農家を手伝わされていたので、そのことは直ぐ分かった。私は多少の不安から解放され、安心して、早く新しい母に馴染もうと心から思った。でも「お母さん」と呼ぶことはどうしてもできなかった。物心が付いてわだかまりの消えない小四の私には難しいことだった。でも早くそう呼ぶようにしようとはいつも思っていた。何と呼んでいいか分からない状態は、それはそれで不便であった。継母は私から「お母さん」と呼ばれないことに不満を表すことはなく、長い目で見てくれているようだった。でも早く「お母さん」と呼ぶことが私達を育ててくれる人への礼儀であり、義務であると子供ながらに思った。

ある時、継母と子供三人で継母の実家へ遊びに行くことになった。汽車で四駅ほど東の山の中だった。私は駅から一人だけ先に走って行った。そうすると、その継母が家の前で出迎えてくれた。

継母は「後から誰が来るで？」と私に尋ねた。私は「お母さん達も来るよ」と言って説明できなかった。ここで「おばさん」と呼ぶことは絶対できない。私は未だ「お母さん」と呼べない決心のない自分が情けなかった。ここで「お母さん」と呼べれば、自分の立場は良くなるのに、できなかった。

お母さんが到着すると、継母は「この人はおまんのお母さんじゃねーもんなー」と強烈な皮肉を言い放った。私は生母を亡くした自分を惨めに思ったし、赤面して、勇気のない自分を恥じた。継母にしてみたら、他人の子を育てている娘を不憫に思い、その子供との関係構築が心配だったことだろう。

幼少の妹は何のわだかまりもなく、初めから「お母さん」と呼んでいた。

先頃、私も「お母さん」と呼ぶべく継母の後を付きまといて機を伺っていたところ、一緒にいた弟が同様だったらしく、先に「お母さん」と呼んだ。七才の子供らしく自然な感じの呼び方だった。でも弟にも葛藤があったはずだ。弟を見直した。私は機先を制せられて、同様に自然な感じで呼べる別の機会を窺うことに作戦変更をしたところだった。

それからある時、やつと意を決して「お母さん」と呼ぶことができた。心の盛大な葛藤劇だった。お母さんは少し驚いた様子だったが、意地らしいと思ったのか、微笑んだようだった。私は大仕事を成せたような気分浸った。年取った今でも蘇るメモリアルな一瞬だった。

それから弟が生まれ兄妹は四人となった。三男は私より十才下であり、私が中学生の頃、よく自転車に乗せて遊んでやった。

私は高校生になると、あれだけ逡巡して継母のことを「お母さん」と呼べるようになったのに、再び呼ばなくなってしまった。成長し、気恥ずかしさが先に立って呼べなくなってしまったのである。当然、大学生や社会人になっても然りであった。

だから、母のいない時には「君江（継母の名）さんが・・・」と言ったりしていた。私に子供ができて以降は、「おばあさん」と呼んでいた。これは異論のない呼び方だ。

母はお節介な性格から、何かと子供達四人に細かいお節介を焼いてくる。そのことが鬱陶しく、私は「うるせーな！」と返すことも多かった。でも心底はといえば、他人の子を育てているという、育ての恩を忘れることはなかった。

父が八十四で亡くなり、母が高齢で認知症気味になってきた時、私が初めて「肩を揉んでやるよ」と言った時、驚いた様子を見せたが、「あれ、ほーけー、わりいね」と言って身を任せた。私達子供達はこの母に育てて貰ったのだと、心を込めた。

「産みの母より育ての母よ」という言葉がある。私は産みの母と八年、育ての母と五十一年の生活だった。母が二人いるのだ。

生母、祖父、祖母、父、継母と順に皆亡くなって行って同じ墓に収まった。私は時々、皆あの世で仲良くしているのだろうか？と思わずにはいられない。元々、あの世だとかを信じない私にとっては珍しい感覚であるが、性格があまりにも違う五人だから、そう思うのは自然な感情だ。

四、学生時代

私は、中学時代は柔道部に入りクラブ活動に熱中した。運動神経（反射神経）が良くないので球技は苦手だったが、その分格闘技が大好きで、大相撲、プロレス、プロボクシング等のテレビ中継は欠かさず観ていた。観ていると体中の血が沸き立つ感じがして興奮した。この格闘技好きの趣味は祖父譲りだった。祖父は若い時、国技館でよく大相撲を見た話をしていた。小柄な父と違って力自慢だった。

私は、中三の時、柔道の郡大会個人戦で、目標は三位入賞だったが、まぐれで優勝した。優勝候補同士が早々と当たり、潰れて

行って、漁夫の利が私に転がり込んだ。それでも市大会でも準優勝だったので、柔道、特に寝技には自信が芽生えた。一概に言って、立ち技は才能、寝技は努力だ。

陸上競技では、砲丸投げと二百メートル走で学校代表となり、砲丸投げでは市大会で優勝した。砲丸投げはフォームが大切であり、陸上部なんかどこにもない市の大会では、フォームを独習でマスターした私はそれがアドバンテージとなり、並居る大型生徒に大きな差をつけての優勝だった。

当時、中学校陸上競技大会には『放送陸上』というのがあって、郡大会レベルで開催され、NHKラジオが記録を集計して全国で何位になるか、ということをやっていた。市代表の私は当然その大会にノミネートされていたが、前日の練習で右手の指先に怪我をしてしまった。そこで個人的に棄権を宣言して、大会当日普段通り学校へ行った。すると先生が「おまんは市の代表だろう、勝手に棄権するな！会場へは直ぐ行け！」と激怒した。会場へ行って、怪我が痛かったが包帯をグルグル巻きして、砲丸を投げたら、郡四位だった。怪我をしなければ優勝も狙えた。

同会場にはその後高校で同級生となり、プロレスラーとなるロケット亀田が走り高跳びに時代遅れの正面跳びで出場していた。身長一メートル九十台とかで異様に目立っていた。彼がフォームをマスターして砲丸投げに出たら無敵だろうにな、と思った。

私は、身長が低い方だったので、高校では柔道に見切りをつけて創部間もないウエイトリフティング部に入った。東京オリンピ

ックを経て、柔道も体重別の理念が芽生えてきたところではあったが、もとよりウエイトリフティングは体重別だから、「この競技は自分に向いている」と思った。高校では中学のクラブ活動とは時間・強度とも雲泥に違うキツイ練習にも何とか耐えていた。

同柔道部には中学のあの郡大会で絶対的優勝候補とみられていた加山が入部して、三年になると全国大会でも大活躍をし、全日本高校柔道チームの一員に選ばれ海外にも派遣された。我が高校の同年代は各運動部に能力の高い生徒が多く、後にラクビー日本代表になる有田とかサッカー日本代表になる清瀬とかがいた。

私は肩関節が硬く、次第にウエイトリフティングの記録の伸びが止り、参加校が少ない競技にも拘わらず県大会でも敗退する始末で、最終的には大きな挫折を味わった。それで、高校生活を帰宅部で勉強メインで過ごせば良かったとチョット後悔の念が湧いたが、運動部に所属した経験はヤツパリ貴重だったと自分に言い聞かせた。

私は勉強にも励んだつもりでいた。しかし、友人からは、「おまんはクラブ活動も勉強も虻蜂取らずだったな」と正直な感想を言われてしまった。

我が校のウエイトリフティング部はその後、後輩部員の活躍で全国最強豪校の一つになりその地位を今でも保っている。

大学受験をすることを決めた時、育英会の特別奨学生に応募してみようと思った。父に話すと、「うちは農地が広い、つまり資

産が大きいから応募は却下される」と意外に変な自信を持った感想であった。

それでも書類を整えて応募して、試験を受けてみたところ、合格した。このテストは知識のテストというより知能テストみたいなものであった。

知能テストは高二で受けていたが、クラブの連日の早朝練習もあり、疲れていて、問題が裏面にもあると気付かず、俺は早く出来た、と高を括り、問題の見直しをやっていた。周りの雰囲気はどうもオカシイので、裏面もあると気付いた時には、万事休すだった。担任の先生に言い訳をしても、「ああそう」程度だった。同じ担任だったので、奨学金試験合格で少しは見直されたのではないか？

我々の大学受験時は学生運動大盛況時代で、東大闘争があり、安田講堂が過激派学生に占拠され、結果、東大と東京教育大は入試がなかった。我々は戦後団塊の世代の直ぐ後で受験生も多く、大学受験倍率はどこも史上最高レベルに高かった。父がシベリアに四年も抑留されていたから、長男の私が生まれたのは団塊の世代の一年後の昭和二十五年になった。

大学は首都圏の国立大学の農学系学部を受験し、合格・入学した。家がブドウ農家だから、卒業後は家に入る（家から通える就職）つもりでいた。

運動部はコリゴリなので、大学生生活エンジョイを目指したが、時間もあるし結局柔道部に入ることにした。またキツイ練習が待

っている、と覚悟したが、国立大学の運動部は大甘だということが分かった。同好会に毛が生えた程度のものだ。私のように高校でキツク鍛えられた者にはそう感じられた。

柔道部の顧問は、教養課程の体育で柔道を教えている当時講道館四天王と言われた山中先生だった。先生からの公私に渡る生涯の薫陶を頂いたことは、普通の柔道能力しかない私にとって予想もしなかった有難いことであった。先生を実家のブドウ狩りに招待したことがあった。父と太平洋戦争の話で盛り上がっていた。過酷な経験だったから話し始めると止まらなくなるのだろう。

国立大学柔道大会で我が校が東大と当たったことがあった。五人制でゼロ対五で敗れた。私の憧れさえをも超えてアカデミックなレベルの高い東大は運動部も強いことを思い知らされた。ずっと後、この学校の卒業式に私が出席することを検討することになるうとは、この時は夢にも思っていなかった。

私は、大学柔道部では怪我也多かった。しかし、中学から高校、大学と常に運動部に所属していたことが自負であり、それだから多くの友人にも恵まれて、運動部に入部していて良かったと思う。

大学二年生の時、三島由紀夫事件が起こった。読書は未だ私の趣味ではなく、三島の『潮騒』くらいしか読んだことはなかった。

『潮騒』は映画にもなり、三島入門小説なので、もっと三島作品を読みたいとは思っていた。三島の皇国史観や、盾の会の活動、はよく知っていたので、「三島が防衛庁に殴り込んで割腹自殺し

た」という唐突でショッキングでデマみたいなニュースにも、私は直ぐ、真実だと思った。

三島の『豊饒の海』シリーズは知っていたが、輪廻転生がテーマで未完の上、評価は高くない、程度の認識だった気がする。輪廻転生に興味はなく、有り得ない概念と思っていた。ということでは『豊饒の海』を全巻読むのはそれから三十五年後のことである。しかしながら、三島の生き様やイデオロギーには興味があり、特に学生運動グループと一人対大勢で討論をやったのには感銘を受けていた。

『豊饒の海』を読んだ後、三島作品は殆んど読破し、山中湖に三島文学館ができてそこにも行ったことがある。

アルバイトも時々した。お中元・お歳暮の配達のアルバイトでは実家の軽バンを持って来て、シーズンの一、二週間をやる。完全歩合制で、初めは日に四十個配達するのがやつとだったが、家々の地理を覚えると一日二百個も配達出来た。その代わり配達荷物は前夜に配達順に積み込んで伝票もその順にしておく。担当区域が良かったので大稼ぎできた。この学生配達バイトは当時「大儲けできる」ことで評判にもなった。

また私は親切心から、ついでに外の郵便受けから郵便や新聞も「来てましたよ」と一緒に渡すと、大概是「今どきの学生さんにこんな親切な人がいる」ということで喜ばれ、贈り物のお裾分けをもらったりした。（今の時代に同じことをしたら、逆に怒られるかも）対応相手は殆んど女性で、若い人がいたりして楽しくもあった。

運輸会社支店長からも一目置かれるようになり、いつも「次のシーズンもな」と念を押された。

「これだけギフトがあつても俺の所には一つも来ない」と言う
と、「十年早い」と言われたが、その翌年には社会人になって、
購買担当の一角になったので、お中元が数個来た。

合コンもやったりして、付き合ったこともあつたが、二十才そこ
そこでいずれも深い付き合いにはならなかった。この時期、失
恋も何回も経験した。

大学生になって、柔道部に入ると酒を飲む機会があつて、瞬く
間にそれは増えた。汗をかいた練習後のビールの味は最高である
ことを発見した。以後ビールが大好物になった。

私の場合、酒癖があまり良くないことも発見した。明るくなる
酒ではあるが、気が大きくなってケンカに発展することもあつた。
最低なのは懇親の場で、殴り合いのケンカをしたことがあつた。
醒めて思い返した時、自己嫌悪のどん底に陥った。

就職してからもあつた。相手も同じ性向（酒癖が悪い）である
ことが常だが、顰蹙もので周りには多大な迷惑をかけた。酒好き
は父親譲りである。祖父母は二人とも殆んど飲まない。曾祖父が
酒好きだったのか？ 我々四人兄弟はいずれも酒を飲むが、酒癖
が悪いのは私だけだ。やはり遺伝というのは不思議だ。メンデル
の法則だな。

就職活動では、国家公務員の農業経済が第一志望であったが、倍率が高く難しく、不合格だった。私の場合、農学系学部だから、入る時は理科系ということに入った。しかし、農業経済学研究室を選択したので、結局、履修は経済や経営を始め文科系が多かった。このため、農業経済のみならず、普通の経済を独習して、経済で国や地方公務員を目指す者もいた。そういうことは今でもある。

農業経済学研究室は「単位が取り易い」ということで人気があり、生徒も多かった。鈴木、宮口の両恩師には、卒論指導から就活まで大変お世話になった。社会人になってからも折に触れご指導・激励を頂いた。

ある企業への就活で、入社試験の和文英訳で、「彼女はフランス人だから・・・」というのを、*She were a France*とやってしまい、後で気が付き、基礎の基礎さえ忘れている英語力の衰えに愕然とし、これではどうしようもないと痛感した。全くダメではないか！

結局、ある大企業に就職はできたが、「勉強は一生」と自分に言い聞かせ、自己啓発は常に心掛けることにした。

日本の五大都市に拠点を持つ企業に就職して、私は東京に配属になることを願っていたが、大阪配属となった。これは全くしょうがないことで、人事異動に期待するしかない。

大阪に暮らしてみると、始めは大阪弁や食べ物の薄味に違和感を覚えたが、慣れるとむしろ好ましいものになった。住めば都、である。でも大阪では職場でできる友達以外、旧来の友達が殆んどいないことが寂しかった。

農家の長男の私は、実家のブドウ収穫時には学生でも社会人でも毎年必ず手伝いに帰った。大阪からは遠いが、東京に居れば頻度高く手伝うことができる。そこで、直属の上司（課長）には飲むと「東京に転勤したい」ニュアンスを伝えた。課長が代る度言っていた。

ある課長が、「山田、お前この会社に骨を埋める気ではないのか？ 埋める気があるのならそのセリフ二度と口にするなよ！」と激怒された。「東京、東京言うと、遠くへ飛ばすぞ！」と脅された。私は浅はかだった。企業の人事なんてそんなものなのだろう。納得して以後言わないことにした。

関西の独身寮生活は面白かった。仕事が終わると飲んで帰るし、帰れば寮でも酒盛りをしていた。従って貯金は出来なかったが。

独身寮は環境のいいところにあり、隣の駅は高級住宅街だった。その駅前に洒落たカフェがあり、夜はエレクトーンの生演奏が

あった。奏者は同年代の気さくな女性で、演奏をしない時間は客席に来て客と話したりしていた。いつの間にか我々寮生とも親しくなった。ひよんなことから私が近くの山にハイキングに誘うとOKだった。それで交際に発展し、更に親しくなつて、一年後くらいには結婚することになった。私が二十五才の時だった。

相手の名前は弘美といい、職業は自宅でエレクトーンやピアノを子供たちに教えている先生だ。気晴らしにカフェで演奏していた。明るく芯がしっかりした自立した女性だ。

私が山梨志向だったから、結婚式は山梨で行った。

妻は料理が趣味で、上手で早く、一方私は食べ物に好き嫌いが一切ないので喜ばれた。但し、出張や急な残業が多く、妻も働いているので、常に温かい食事になるということにはなかった。でも十分満足だったので、食事に不満を持ったことは今まで一度もない。

妻は、三才の時に父親を病気で亡くし、歯科医院に助手として勤めていた母親に育てられた、“母一人子一人”の境遇である。その境遇はすごく厳しかったはずだが、母親が不憫に思い、たっぷりの愛情で娘の言いなり同然に育てたので、自分でも「ワガママに育った、ビンボー人のお嬢さんやねん」と明るく言っている。私も全く同感だ。

大阪配属当初から、帰り道の十三に阪急電鉄の柔道場が見えたから、稽古と一緒にやらせてもらっていた。職場以外の人々と交流ができて有意義だった。そうしている内、大阪支店に柔道大好

きの社員が転勤で来て、関連会社も含めれば同好の社員も何人かいることから、柔道部が創部された。会社も福利厚生の一環として、会議室を一つ改修して、柔道場（剣道場、卓球場にもなる）を作ってくれた。

女子部員を募集したり、皆でミカン狩りに行ったり、餅つき大会を開催したりした。勿論、対外試合もやり、毎年大阪で開催される全国実業団柔道大会にも出場した。当時この大会は年代別個人戦というユニークなもので、私は一回戦を突破したことがある。“全日本”を冠する大会での一勝は光栄である。

大学の恩師鈴木先生の退官パーティーが東京であったので出席した。先生は挨拶の中で、「最近、神は本当にいるのだ、と思うようになった」と言った。あの無神論的な計量経済学の先生がそんなことを言うんだ、と思ったが、私も日常生活で最近スピリチュアルな経験をすることがあり、そんな気がしないこともない。

今まで一度も出て来たことがない生母や亡くなった知人が夢に出て来るのだ。また全国実業団柔道大会で高校の同級生で柔道部だったあの加山とそっくりな選手がいたから、声をかけたら別人だった。その直ぐ後、彼は柔道教師として転居したフランスでギャングの抗争事件に巻き込まれ、殺されセーヌ川に浮かんでいた事を知らされた。

「前生の記憶がある」という人達が出てくる不思議なTV番組があったり・・・

ビッグバンで拡大する宇宙の外側とか、ダークマターとか、時空の歪みとか、ブラックホールとか、量子力学とか・・・、人知を決定的に超えた事が一杯ある。

六、娘の誕生

子供を持つことに憧れていた私達夫婦だったが、中々子供に恵まれなかった。努力家であり勉強家の妻は妊活の本を何冊も読み知識を高めた。その甲斐あって、結婚三年後、やっと息子が誕生した。

出産後妻は直ぐ妊娠し、翌年、娘が誕生した。こんなに直ぐ次ができるとは思わなかった。息子と娘の誕生日は丸一年の差はなく、十一日少ない。誕生日によっては双子でもないのに兄弟で同じ学年になることが有り得ることを初めて知った。

娘はアサミと名付け、極めて健康で順調に育った。息子の方は私に似てアレルギーー体質で妻も育児に神経を使ったが、娘にはそれもなく、育て易い子だった。妻は一年先に生まれた息子の育児をどうしても優先しがちで、娘は放って置かれることが多かった。「この子は強く育つ」と思ったし、実際強く育って行った。

娘は物覚えが良く、お兄ちゃんと一緒にひらがなをお母さんから習い、二才で読めた。年上の子がいる隣家へ一人で遊びに行つた時、全部読んだので、そこのおばあさんが驚いて、わざわざ我が家まで来て、「アサミちゃんがひらがなを読むから、当てずっぽかと思っただけど、全部読んだで。驚いたわ」と感想を述べた。

三才の頃には、妻が自宅で教えているエレクトーンやピアノのお姉ちゃん達に遊んでもらって、対等の口を利くようになった。気に入らない事があると大阪弁の乱暴な言葉を使つて、お姉ちゃん達を追いかけ回したり叩いたり、烈女振りを発揮しだした。

几帳面で、一人で鼻をかめるようになる、ティッシュをキッチンと四角に畳んで使った。お母さんやお兄ちゃんとは違う、私と同じやり方だ。この几帳面さから、親戚から「性格がお父さん似」と言われた。

娘には私の生母の面影がある。食べ物もオカカご飯が好きで、生母も好きだったし、私も好きだ。昔、我家ではそれを「猫飯」と呼んでいたからよく憶えている。

また、泣かない子で、娘が泣いているシーンの記憶が私には無い。この子に柔道とか砲丸投げとか、私が教えられるスポーツを将来やらせたら結構いいとこまで行くかもと、“親の勘違い”的に考えてしまう。

妻の方も全く同じで、三、四才の頃から熱心なピアノのレッスンを開始した。

でも結局、本人の意思が大前提だから、両親の意向などといったものは、その後早い時期に雲散霧消させられた。

私は娘が可愛くてしようがなく、
「お父さんが世界で一番好きなのは誰やるな？」と問うと、
「アサミに決まっとるやろ！」と、
いつも（当り前の事訊かんといて！）怒ったように返されるのが
心地よかった。

息子が幼稚園の年中、娘が年少の時、私は東京の本社へ転勤になった。妻には仕事があるので単身赴任となった。妻は週末はよく子供達を東京へ連れて来た。小学生未満の子供は鉄道が無料なので、我が子達は無料で新幹線を地球何周分か乗った。普通の子供は憧れの新幹線に乗ると喜ぶが、我が子達は飽きているから、「乗ったら即寝る」と妻が言っていた。

家族が東京に来たある日、深夜に大きい地震があった。私は咄嗟に横に寝ている娘に覆い被さった。娘も察して目が覚め、余震の不安の中、「お父さんがアサミを護ってくれるの？」と無邪気に言った。「そうやで、お父さんに決まっとるやろ！」と言うと、自分のセリフを思い出して笑って、安心して眠った。

それから三十八年後、娘を護ってやれないことになると
は・・・

子供たちが東京から帰る時は、妻の指示だと思いが、必ず置手紙があった。無邪気な心そのまま表れている貴重な手紙だから私は捨てずに全てを保存している。

娘は、小学校は関西の名門で難関の大阪教育大付属池田小学校を受験し、合格・入学した。この学校は家から3駅離れてはいるが通学も比較的楽だ。この小学校で、十数年後にあの忌まわしい凄惨な襲撃・殺人事件が起きた。遺族の心情を思うといたたまれない。犠牲者のご冥福を心からお祈り致します。

七、ヒューストン

大阪支店在任中の終期、所属部で時間外に英会話研修が始まった。我が部はアメリカ産農産物の輸入が多く、英会話を修得することは業務上役立つ。私は本社に転勤したが、部署が同じだから英語は余計に必要な可能性がある。本社は支店よりも英会話研修は一層盛んだ。

更に会社が海外拠点や海外子会社を設立したので、英会話研修気運は高まる一方だった。会社は海外要員選抜試験制度を作り、応募するように若者に働きかけた。私は入社後十年経っていたから若者のカテゴリーではないが、後輩から「一緒に受けましょう」と誘われた。英会話研修で会社予算を使ってきた我々としては、応募するのは義務みたいな意識も少し芽生えた。

選抜試験は応募者も多く、難関であるらしい。でも、万一それに受かって、海外要員に登録されても、海外赴任命令は拒否できる。海外は特別だから人事にも特別ルールがある。

私は、苦手だった英語が、英会話研修を通じてむしろ好きになってきた。妻は元々英語好きで、高校の時、英検二級を取得していた。私にも英検二級取得を勧めていた。その気になって二級に挑戦したが、筆記は受かるものの会話で二度落ちた。結局、三度目で合格した。

海外要員試験に応募の意思が固まったが、「海外勤務がしたい」という気持ちは無かった。上司（部長）に応募意思を伝えると、「受からないと思うがヤツテミナハレ」と率直なことを言われた。俺の評価は高くないんだなと素直にガツカリした。

試験は英語、一般常識、論文で、手応えもあり“予想に反して”合格した。

海外要員になると翌年には、外部の貿易研修センターで四カ月の研修、更にその翌年には四カ月の米国研修を受けることになった。米国研修は、米国家庭にホームステイをしながら大学での三カ月の英語研修や、穀物産地をレンタカーで回って予めアポを取っておいた農協等にその年の穀物の作柄や業容を訊ねて調査する、というものだった。

英語研修はハードなものであり、初めてのホームステイにも戸惑ったものの、アメリカンファミリーと親交ができて、極めて有

意義であった。四十年近く経った今でも交友を続けているファミリーもある。また、大学での学習では予習復習が必須で、日本と違い、アメリカの大学の厳しさを知った。

穀物産地研修では、当時は穀物大余剰の状況であったが、アメリカ農業のスケールはヤッパリ巨大で、底知れない生産力を感じ、実に印象的であった。

研修中に訪問したアメリカ各地からは、家族に絵葉書を毎日のように送った。

私はこのような貴重な研修の機会をもらって、会社に感謝すると共に、貿易業務を通じて必ずや会社に貢献しようと思った。

海外研修の二年後には、ヒューストンにある子会社への転勤の打診があり、私はそれを受けた。海外要員選抜試験を受けたことから、私の人生はドメスティックなものから、インターナショナルな方向へ大転換した。あのアメリカで働き、生活することになったことに高揚感を覚えた。

私のヒューストン赴任には、海外好きな妻は「ついて行く」をいち早く“打診段階”から表明したが、小五の息子は「絶対行かへん」と言って抵抗していた。当時日本は“Japan as No.1”ともてはやされてもいたので、息子にしたらアメリカは大したことないとの感覚だったようだ。小四の娘は好奇心旺盛な性格から「行ってもいいで」と呑気だった。私は「アメリカには面白いことが一杯あるんや、ノーベル賞受賞者数だって、日本の百倍や」と騙すように説得した。

私がアメリカ研修中にあちらこちらの訪問地から毎日のように家族に送った現地ハイライトの絵葉書が、結構子供二人にアツピールしているようで助かった。

結局、(当然のことながら)家族全員で赴任することになった。

学校の関係から私より一カ月程遅れてアメリカに来た家族を、私はニューヨークまで行って出迎えた。折角だから市内観光をした。自由の女神では混雑した内部階段を上り冠部展望台まで行った。ワールドトレードセンタービル展望台、エンパイアステートビル展望台、タイムズスクエア、大統領や有名人の似顔絵のある由緒あるレストラン、セントラルパーク、ハーレム、等々、子供達は目を丸くしてニューヨークを堪能した。夜は夜でブロードウェイでミュージカル『キャッツ』を鑑賞した。ストーリーは分からなくても、老猫が歌う歌「Memoryが良かった」と異口同音に言った。

東京への単身赴任で、別居生活を続けていた私の一家は、ヒューストンで四年振りに一緒に生活を再開した。ヒューストンに赴任すると、子供達は、日本の全日制学校は勿論ないので、現地校に行かざるをえない。予想されていたこととはいえ、小学生で英語教育ゼロの子供達にとっては悲劇的とも言える学校生活が始まった。先生や級友の言っている事は分からないし、自分の意思は全く伝わらない。

それでもアメリカには ESL コースがある。英語が母国語でない生徒に毎日二時間英語を基礎から教えてくれる。(勿論タダで)

日本語補習校はあり、ダウンタウンで毎週土曜日三時間だけ、
国語（日本語）と算数・数学を教えてくれる。先生は父兄だった
り、日本人留学生だったり。子供達にはここが結構息抜きで楽し
みにもなっている。

息子には現地校で意外に早く友達が出来て家に遊びに来た。随
分体が大きいアフリカンアメリカンだった。息子が「Bob（彼）
は二年留年しているんや」と言った。アメリカの学校は大学のみ
ならず、小学校から厳しいようだ。

その小学校でやっぱ留年している六年生の女の子（十三、四
才らしい）が妊娠してしまったという事件があった。子供が子供
を産む、というアメリカ独特の社会問題だ。娘（十才）は「産む
んやて」と平気な顔をして状況を語った。性教育が自然にできて
いる。

家族はアメリカの生活に予想外の速さで適応して行った。

渡米一年ほど過ぎたある日、映画『スタンドバイミー』のビデ
オを借りて来て家族で観た。家族の中でも娘が、英語のストーリ
ーがよく理解できているようで、私は、娘の英語力急向上に驚い
た。映画の最後のシーンで男の子達の友情とその後の展開に感動
した私が涙ぐむと、娘が、「これ位の事で泣きなや！」と言った。
女の子には男の子の友情は分からないのだろうな、と思ったが、
生意気にも私の親みたいな口調だった。

女の子はおしゃべりで友達とよく話すから英語の上達が早い。

娘は渡米三年目の小学七年生（アメリカの学制は州ごとに異なり、学校ごとに異なったりする）の時、SATという大学入学適正一斉試験を受けた。これは数学と英語のテストで、数学は知能テストのようなものだ。娘は数学のスコアが非常に良かったので、デューク大学のFIPというプログラムで表彰された。このことは地方紙にも載った。私達夫婦は娘を誇らしく思った。同様に表彰された七年生と共に、同大学での三週間のサマースクールに招待された。そのサマースクールに、「黒船ペリー提督の子孫の女の子が来ていた」と言っていた。ホンマかいな。

娘はこの頃、飛び級もした。落第もあり飛び級もある、それがアメリカだ。（日本の中学に戻った時、その飛び級は考慮されなかったが）

アメリカの学校の三カ月にも及ぶ夏休みには妻が娘と長いヨーロッパ旅行に行った。息子は一人で祖母のいる川西市に一時帰国した。これが我が一家の夏のイベントになった。

娘はこのヨーロッパ旅行で異文化や風景や歴史に大きな興味を持ち、海外旅行が大好きになり、将来の人生にも影響することになった。

私達が赴任中、隣州ルイジアナのバトンルージュで『服部君射殺事件』が起こった。ハロウインでコスチュームを着て祝っていた日本人留学生が不審者に間違われて射殺された。

我が子達もアメリカ生活に慣れて、ハロウィーンで近所の家々を回り、キャンディーをもらっている。

私は四年のヒューストン勤務を経て、東京の本社へ転勤（戻る）することになった。家族は、義母がそばに住む宝塚の家へまた戻ることにした。妻はそこでピアノの仕事を再開できる。

子供達に、「アメリカはどうだった？」と感想を訊ねると、「良くもあり、悪くもあり」とのこと。とてもいい経験になっているハズだが・・・

私は、アメリカ滞在中に親友二人が遊びにきたので、方々案内している途中、彼等のスーツケースが入っている私の車を盗まれてしまう、というアクシデントに見舞われた。警察への届け出、クレジットカードのキャンセル、航空券の再手配等々、散々な目にあったが、保険もあり、一部は補償された。

彼らは「流石アメリカ、見事な泥棒だ」などと言って、呑気だったから救われた。

私にも色々あったが、アメリカで生活していい経験になったな、と心底思った。

帰国後間もなく、三男の弟が結婚し、それを機に彼が実家の農業を継ぐことになった。弟としては大きな決断であったことだろう。農家の長男として、長いこと実家の将来を気にしていた私としては嬉しいことで、今まで通り、出来る限り実家のブドウ栽培を手伝ってやろうと思った。そうすれば両親にも義理立てできる。

八、娘の学生時代

帰国後直ぐ、妻は家でピアノを近所の子供たちに教える仕事を再開した。息子も娘も近くの市立中学校に通い出した。

娘はその中学で、生徒会長選挙に立候補した。私自身は大勢の前に立つと気圧される上がり症の性格なので、生徒会長に立候補などとは思ひもしなかったことなので、驚き、娘は自分には似ていない性格だなと素直に思った。同時に、生母に似ているのだなと直感した。あの何にでも積極的な母に。

娘は僅差で落選だった。「友達が何人かインフルエンザで選挙当日欠席したから負けた。本当は勝てたのに・・・」と負け惜しみを言っていた。ポジティブシンキングだな。

娘は、高校受験先を大阪教育大学付属池田高校にした。小学校で入学したその上の学校だから馴染みもあった。中学時代から大志は東大を目指すようになったので、私が住む東京でも、桜蔭女子高校を当たってみることにした。中高一貫校だから、受験があるのか訊ねてみたところ、「欠員がある場合は入試をするが、欠

員は殆んど出ない」ということだった。「あれば連絡する」とのことだったが連絡は来なかった。大教大付属池田高が受かったので入学した。

息子はその前年に大阪の進学高に入学した。二人共アメリカ滞在により英語が得意だったので、英語の配点が高い入試には有利だった。アメリカ赴任のメリットに違いなかった。

1995年一月十七日、阪神大震災が起こった。私は前日までの三連休の週末、普通であれば宝塚の自宅に行つて、その日の早朝、東京に戻る予定だったが、ゴルフの誘いがあり、東京にいた。十日の地震の日の早朝、いつものように宝塚から東京に向かっていれば、新大阪駅手前の電車内で被災し、生死に関わるようになっていた可能性があった。人生なんて何が起こるか分からない、『塞翁が馬』だ。

娘は高校の卒業記念文集に、大きい字でページ一杯に「我が道を行く」と書いた。ウーン、世間的な一般的な将来の人生とか生活は考えていない事が窺い知れた。

娘は、目指していた東大の法学部に現役で合格した。数学と英語が得意な上、歴史、地理が大好きだから、入試は無敵だった。模擬試験では常に東大文一A判定だったから、両親は期待こそすれ心配はしていなかった。

一浪していた息子は、阪大の歯学部合格した。祖母から歯科医院に勤めていた話を聞いていたこともそこを目指す志望動機に繋がった。

娘は「法学部女子学生の三分の二は桜蔭や」と言っていた。

娘は当初、私が単身赴任するため買って住んでいる日野の家から駒場キャンパスへ通学していたが、「遠いから不便」との屁理屈をつけて、数カ月で出て行った。

親族で東大に合格したのは娘が初めてであり、私の両親は、「東大の学園祭に行ってみよう」と娘に言ったので、娘はそれに応え、ついでに私達夫婦と一緒に学園祭（駒場祭）に案内した。娘は猛虎会という阪神タイガースを応援するクラブに所属していて、猛虎会のブースに案内した。関西出身者が多いようだった。

本郷の本学にも案内してもらった。東大闘争で連日ニュース映像になったあのシンボリックな安田講堂の地下の学食で皆でカレーライスを食べた。両親、我々夫婦とも感慨深いものだった。

アメリカ生活と母と行ったヨーロッパ旅行の影響で外国文化に興味を持ち、海外旅行大好き人間になった娘は、世界旅行のバックパッカーに憧れた。遂には、「二年間休学してバックパッカーしてみたい」と言い出し、両親に了解を求めた。「に、二年って！・・・」、私達が「危険だから、ダメ!」と言っても、聞く娘ではないから渋々了解した。この娘はどこに行っても間違っただ判断はしないだろうという信頼感もあった。

娘は喜々として出発した。娘の話によると、バックパッカー同士海外では国籍を問わず友達になる。ある時、アフリカで友達に

なったバックパッカー女子大生がマラリアに罹り、あつけなく亡くなってしまう。娘は人生の儚さも容赦なく味わった。

娘は、気に入った場所では、アルバイトして滞在型で過ごしたりした。

一方、私に再びヒューストンへの転勤命令が出た。前回帰国後六年にして再びアメリカに赴任することになった。今回は単身で行くことにした。

ある日、ヒューストンの私に妻から電話があった。

開口一番「アサミが死んじゃった〜！」と泣いて言った。

私は驚愕したが、よく訊くと、インドで列車の重大事故が起こって、娘がインドから帰国する日になっても帰国しないから、その事故に巻き込まれたのではないか、ということだった。インドでは列車事故がよく起こる。インドのその列車事故は大き過ぎて、犠牲者の身元が十分には判明していない。外国人観光客も通常大勢乗っている。でも娘は、インド航空の帰国便を変更している可能性もあるので、電話して確認して欲しい、ということだった。

私がデリー空港のインド航空に電話して事情を説明すると、カウンタ―かどこかに回された。またそこで事情を説明すると、電話の相手が替わって、「お父さん？」とアサミの声が聞こえた。私は、娘が幽霊になってそこに現れたのかと思った。相手は確かに娘で、インド航空の帰り便をリコンファームしなかったから、その便に乗れなくなってしまった。しようがないから翌日の別便の予約に来て、交渉している真っ最中だったのだ。

インド航空の場合は、リコンファームが必須で、しないとその便には乗れなくなる可能性が高い、ということだ。私は直ぐ妻に電話して事情を説明した。

娘の就活時期は日本では“失われた何十年”と言われた不況の時期に当り、就職戦線は求職側に不利な時期だったが、希望の企業に就職した。娘は英語が得意だから、英検一級、TOEIC990点（満点）を取っていたから就活には圧倒的に有利だった。

私は、二回目のヒューストン勤務を三年で終え、東京の子会社に出向になった。ヒューストンでの最終年には、あの9.11事件が起こり、ニューヨークのワールドトレードセンタービル二棟が崩れ去った。ヒューストンでも朝の時間で、私はアメリカ人社員と伴に急遽TVニュース中継を観だしたところだった。二機目の旅客機がもう一方のビルに向かって来た時、私は状況が未だ良く分からず、パイロットが気を失っているのだと思った。するとその旅客機はビルに突っ込んだ。アメリカ人は皆興奮して、「カミカゼ」「カミカゼ」と言っていた。それが日本語だと彼らが分かって言っているのかどうかは分からなかったが、この場合、日本人としては聞けなかった。アメリカ社会は大混乱となった。私は事件の一週間後、ヒューストン・東京を社用重要案件のため往復することになったが、飛行機は行きは満席、帰りはたったの数人しか乗っていなかった。

私は事件から四カ月後の離米前、世界が震撼した事件の現場に行ってみた。未だ規制線が張られていて立ち入り禁止だった。

私達夫婦は娘の卒業式には是非出てみたいと思っていた。東大の入学式・卒業式は両親や家族には人気があり、希望者は多いらしい。私達は入学式当時は意識も低く、出席は両親ともしなかった。卒業式の日には会社の重要会議が予定されてしまった。私にはプレゼンの役割があるので、会議の欠席は許されない。それでも部下にプレゼンを任せて卒業式に行こうか思案した。仮病を使う手もあるな、とも思ったが、東大の卒業式に行ったことは明白になるだろう。東大の卒業式の学長の訓示は毎年ニュースになるから明らかだ。

私は、結局、ヤツパリ会議を選んだ。人生で一度しかないであろう貴重なチャンスを逃さざるを得なくて非常に「残念」と言う他なかった。

九、娘の社会人時代

娘の会社は残業が多く、「毎日の帰宅は深夜になる」と言っていた。平日、娘を食事に誘うと、夜十時の待ち合わせになってしまふ。娘はあれだけバックパッカー旅行したのに、相変わらず海外旅行好きで、やっぱり発展途上のアフリカ、中東、アジア、中

南米がメインのようだ。これ程迄もの娘の「異国への興味」には、私は異常ささえ感じた。海外旅行は、長い休みが取り易い年末年始、GW、盆、等だから航空券は通常より可成り高くなるし・・・

ある時、私がアメリカ行きの飛行機に乗り込む時、娘に似た人がいたので傍に行って確認すると娘だった。娘は「キューバ旅行」とのこと。この時、帰り便も偶然同じ便だった。国際線に親子が行き帰りの便で偶然一緒になるなんて・・・

娘は社会人生活に順調に慣れると、早くも西日暮里に新築されたタワーマンションを購入した。成田空港に便利な場所だから選んだのだ。私はお祝いに高級な家具セットをプレゼントした。妻が東京に来た時には一緒に泊めさせてもらった。高層階の部屋から見える東京の夜景が素晴らしかった。

私は会社での処遇に大きな不満をもつようになり、2005年三月、遂に辞めた。米国研修を受けた時のあの純粋な献身的気持ちは消え失せていた。私としては一生に一度の人生を歩んでいるのだから、不公平な処遇には不満を持たざるを得なかった。

家族は皆、「お父さんの自由にしたらいいやん」と言った。自立したドライな家族で良かった。お金のこともあり逡巡はしたが、金と気持ちを比べたら気持ちの方が大切だった。決断して退職したことに後悔は微塵も無い。

私は JICA の SV (発展途上国支援シニアボランティア) に応募し、合格して、2005年四月シリアに派遣された。派遣されてみる

と、シリアの歴史、イスラム教とその文化、遺跡、景色、に魅了された。中東という土地柄、ユダヤ教、キリスト教にも興味が湧いてきた。人々も親切で、治安も東京より良い、と思った。でも、治安の良さは秘密警察のお陰らしく、抑圧された宗派の憤怒のマグマは溜まっているようであった。(2011年に『シリアの春』の争乱が勃発し内戦に発展した)

娘はシリアに既に詳しかったので、派遣前には色々アドバイスをもらった。また、ダマスクローズの薔薇水をお土産に要求されたので一時帰国時には買って帰った。

私は活動にも慣れてくると、多くの提案もして、相手先に受け入れられたものが感謝されて、活動に充実感が湧いてきた。二年の活動を終えて帰国する時には、シリアの受け入れ先の担当大臣が送別会を開催してくれた程である。

息子は歯科医となり、大阪市内の大手歯科医院で働きだし、宝塚から大阪に通勤していた。私がシリアに派遣された直ぐ後の2005年四月、息子が通勤しているJR宝塚線の尼崎で通勤電車が脱線する大事故が起こった。息子がいつも乗る可能性のある時刻の電車だったが、その日は前の電車に乗ったらしい。事故電車の前方車両に乗っていたらと思うとゾッとする。シリアでもこの事故は大きく報道された。

私はシリアでの二年間の支援活動を終わると、次にヨルダンでのJICAのSVに応募し、合格・採用された。2008年三月からのヨルダンでの支援活動は極めて退屈なもので、私は現地の受け入

れ先から何も期待されていないな、という感じがした。社会主義国シリアと違って隣国ヨルダンには自由が溢れているが、支援受け慣れしている感じがした。

ヨルダンにも世界遺産の遺跡や観光スポットは多かったので、休みの時は遺跡・観光地巡りをした。ペトラ遺跡、ワディラム砂漠、紅海の景色は素晴らしかった。砂漠の一泊ツアーでは、星が降るような綺麗な星空が見られて、心が洗われるようだった。

私はヨルダンから宝塚へ帰国して、肉屋の配達のアルバイトを始めた。六十才からは厚生年金を受給するようになったが、何も働かないのは勿体ない。しかし、バイトサラリーと年金額の月額合計がある一定額を超えると、年金額が減らされる。このため、減らされない範囲内にバイト日にちを抑えた。

山梨の実家近くに、「ブドウ園を貸したい」という老夫妻がいたので私はバイトを辞めてそれを借りることにした。実家のブドウ園の手伝いもできる。山梨にアパートを借りてブドウ栽培を始めた。ブドウ園は二十アールの小さいものだが、私のような新規老ファーマーにしてみれば丁度いい。私は小さい時からブドウ園を手伝わされていたからある程度の知識・経験はある。ブドウ園には最近開発された人気のシャインマスカットが植えてあった。シャインマスカットは市場価格が高く、期待以上の収入となっている。私は早々から会計ソフトを使って自ら確定申告書を作成し、青色申告の六十五万円控除も受け、納税義務を果たしている。数字と格闘することは、ボケ防止にもなる。

ブドウ栽培を始めて三年目、心臓弁膜症が発見され、手術を受け、結局五週間も入院した。「手術の生命危険率七パーセント」と言われたが、心配はしていなかった。物理的な心臓機能異常だから、手術を受ければ正常に戻ることを信じていた。現在、日常生活には問題はない。循環器系が弱いのは父方からの遺伝だ。

娘は、「政治家になりたい」と言い出したことがあった。今の会社を辞めて、大学時代のクラブの先輩が衆院議員なので、その秘書になって、将来には国政に挑戦したい、というのだ。私達夫婦は、「それだけはよした方がいい」と止めた。娘には三バン（地盤…後援会、看板…知名度、鞆…資金）が無い。政治の世界は甘くない。リーダーシップも協調性も権謀術数も辛抱も世渡り上手も必要だ。娘は思い付きで言い出したのではないにしても、考えが甘い。今まで娘の言うことに反対したことは全く無い。でもこの件は別で、夫婦で強く反対した。結局娘は折れた。将来的にも諦めたようだった。

娘は三十五才の時、結婚した。相手はネパール旅行時に知り合ったネパール人だ。彼は3Dアニメーターをしていて、マレーシアのクアランプールに転職したから、娘は会社をサッサと辞めてついて行った。現地の日本企業に再就職して、共稼ぎしだした。

夫婦は「子供は作らない」方針なので、娘の子供を期待していた私達には残念だ。娘の性格を受け継いだ個性豊かな孫に是非とも会いたいのに・・・

十、娘よ、またな！

娘はクアラルンプールで体調が少し悪くなり、日本へ帰った時検査をしたところ、子宮癌が発見された。そのまま日本で手術した方がよいと考え、歯科医である兄に相談して病院と外科医を紹介してもらった。「手術は成功した」ということだったので、家族は安心していた。

ところが一年もすると、「リンパへの転移が見つかった」ということになり、私は絶望感にさいなまれた。リンパは体中を巡っているから、転移があらゆる場所に発生するのでは、と危惧せざるを得なかった。私の生母の例もあるし、どうしても悲観的になり、一人で泣いていた。私の母方の家系は癌家系なのだ。

そうしている内、「肺への転移が見つかった」ということでヤッパリなと思った。そして、あの世の私の生母は同じ癌を患う孫娘を護ってくれないのか、と無理な事と分かかっていても憤りを覚えた。

娘は、私や息子と異なりアレルギー体質ではないことが、逆に免疫機能が弱く、抗癌作用が低く、癌が発生してしまったのだろうか？ 私が代ってやれるものなら代ってやりたい。

肺癌には有名な免疫療法薬オプジーボがあるが、肺原発性癌でないと効果はない、とのことだ。肺移植はできないのだろうか？ できるなら、私の肺を提供するのに。でもステージⅢ・五らしいから手術は無効らしい。

あれよあれよという間に娘の病気は進んで行き、シリアスなものになってきた。夫も日本へ来て、夫婦でリモートで働いていた。

令和四年五月上旬、妻から山梨の私に電話があった。開口一番「アサミ、頭痛いねんて」とぶっきらぼうに言った。

私は直ぐにえも言われぬ悪い気分になって、全てを察して、次の瞬間子供のように号泣していた。超不満の悔し泣きだ。

楽天的な妻も私の気持ちは察したようだった。

私は娘の癌が遂に脳に転移したのだろうと思った。でも、そんな悲劇があっただいのか……。最悪のデジャブではないか。神は娘と私達家族に何という無慈悲な試練を与えるのか。俺は旧約聖書に出て来るヨブか。

脳に癌が転移したら娘はお終いだ。最悪だ。

お墓に行つて先祖に、病気のアサミを助けてくれるよう何回も祈つたのに、助けてくれないのか。脳癌で三十二才で亡くなった生母春美は、孫娘が同じ脳癌になるのを防いで護つてくれないのか。あの世で何をしているのだろうか、孫娘を護らず同じ病気で苦しませるのか。父タケシはあれだけ孫娘アサミを可愛がついて

たのに護ってくれないのか。継母君江だってそうだ。祖母だってひ孫に会ったこともあったし、可愛がっていた孫の私の子を護ってくれないのか。私は悔しくて情けなかった。

神仏に祈ったのに回数が足りなかったのか。

私は一人でいつまでも声を上げて泣いた。声を出して泣くのは殆んどないことだが、悲しくて、悔しくてどうしようもない気持ちだった。

娘はこの期に及んでも、自分の容態に関する情報は自分で全てコントロールして、家族が主治医と直接話すのを許さなかった。ネパール人の夫は日本語が解らないから、娘からより詳細を得ているようだったが、彼が私達に全てを知らせるのは許されていないかった。だから脳に転移しているのかどうかは実は私達夫婦には不明だった。娘は妻には、「頭痛いねん」とだけ言ったらしい。

娘が私達から自分の情報を遠ざけるのは、私が物事を悲観的に捉える性格であることを分かっているから、現状を悲しんで欲しくないからなのだろう。自分のことは自分でよく分かっているから、家族には悲観して欲しくないのだろう。娘はジメジメメソメソしたことは大嫌いなのだ。

娘はよく「性格が父親似」と言われる。確かに厳格で几帳面さはその通りだが、気丈さや涙もろくないところ等は違う。むしろ娘は私の生母春美に性格がそっくりだ。

楽天的な性格な妻も段々シリアスになって行く娘の病状に、悲観的になってきた。

私は、香り高いダマスクローズの苗をネット販売で見つけたので、買ってブドウ作業場の敷地に植えた。娘との思い出のある生きたバラを身近で育てたいと強く思った。来年花を付けてくれると嬉しいが。どんな香りがするのだろうか。娘夫婦に送る山梨のトウモロコシと一緒に「ダマスクローズを植えた」事を手紙にして同封した。

令和四年六月になると、娘は「自分は緩和ケアに入る」ことを告げた。

アア、ヤツパリな。もう余命幾ばくも無い。実情を告げた時にはもう死がそこまできている状態。それはないだろう。でもそれが現実で、我々両親と兄は受け入れざるを得ない。

娘はさぞかし無念なことだろうな。私は心が張り裂けそうだ。肺癌はステージⅣ、脳転移も見られる。

癌闘病三年半、子宮癌発見・手術から始まってリンパ転移、抗ガン剤治療、放射線治療、肺転移、脳転移・・・

キツイ闘病を気丈に本当によく頑張ったな。

娘は自分が祖母春美と同じ脳癌に侵されてしまった事をどう思っているのだろうか。癌家系を恨んでいるだろうか？　そういう言動は一切無いが・・・

もう糖質制限に拘る必要はないな。家族はもう明るく振舞って娘に接するしかない。それができそうもない父親は遠ざけられた。娘は同情されるのが大嫌い。この期に及んでも烈女を貫く。むし

ろ笑って送ってもらいたいのだ。娘の気持ちは分かっているのだが、私にはそれができない。

日々弱っていく娘を妻は母らしく思い切り抱きしめ、「よく頑張ったやん！」と明るく言った。娘はなすがままに身を任せた。私も同じことをしたかったが、号泣しそうで、できなかった。死んでいく娘に少しでも嫌な思いはさせたくない。ここでこんなに気丈にも明るく振舞える妻の芯の強さに尊敬の念が湧き、同時に羨ましく思った。

娘の闘病期は新型コロナ混乱期とほぼ重なるが、それより一年ほど早く始まった。初めの手術後は、立山黒部旅行を夫婦でして、ヒマラヤの国ネパール、カトマンズ出身の夫から、「日本アルプスは素晴らしい。感動した・・・。」というメールが届いた。

その次は、「富士山の ponds へ旅行した・・・。」というメールも来た。私は、「ponds ではなく Lakes だろう・・・。」と返したが、富士五湖ではなく忍野八海のことだった。

山梨へ夫婦で来たのだから、私のいる山梨別宅にも来ればよかったのに・・・

夫婦は語らなかったが、私の実家の墓参りをしたのかも知れない。可愛がってくれた祖父母達が眠る。そして増富のラジウム温泉にも行ったのかな？ 癌にも効果があるとも言われている珍しいラジウム温泉。ウェブリサーチ好きの娘夫婦なら有り得るところだ。一縷の望みがあればやってみる、生への執着から藁にも縋る、娘なら考えるかも。

緩和ケア前には、夫に言わずと、「回復したら夫婦で北海道旅行をしよう」と話していた。海外旅行大好きな娘にしてはささやかな望みだ。それを聞いた時は、私は、ハイヤーでも使って行かしてやりたい気持ちになったが、もう娘の体力がダメだった。

緩和ケアの一環で、娘は夫婦で宝塚の実家へ六月中旬に帰った。兄が車移動を担当した。途中、「アジサイが見たい」と言ったので、名所へ行ったが、娘はもう車椅子移動しかできないので、一面の光景へは行けなかった。妻が、数輪もらってきて見せてあげた。

実家では祖父母の仏壇の前で、「そちらへ行くからよろしくな」「でも直ぐには行かへんで」とジョークを飛ばした。

兄妹ともおばあちゃんが大好きだった。

妻の誕生日には、娘は夫にケーキを買って来てもらって、ハッピーバースデーを歌って祝った。妻には感傷的な誕生日になった。また、買ってあった色紙二枚に日本語と英語で皆に感謝の気持ちを残した。誕生日が同じである三島由紀夫のファンであった娘は、『豊饒の海』から輪廻転生に興味があり、「またね!」「またな!」「See you!」と最後に書いた。決して涙を見せない、いつまでも気丈な娘だ。

それから、夫婦は病院に近い高槻のアパートに戻った。

二週間後の七月四日、容態が悪化した。

ブドウ栽培で山梨にいた私は。夜行高速バスで京都に向かった。五日未明四時頃、私のスマホに夫から電話が入った。私はバスのトイレに入り受けた。「Asami just passed away」（今、亡くなった） 私は声を出さず泣きじゃくった。京都でバスを降りて、高槻は近いから六時過ぎには着いた。

最愛の娘は生きて眠っているような穏やかな表情だ。私は娘の肩をつかんで号泣した。人生でこれ以上の悲しいことはない。妻も息子も、夫も泣き腫らした顔をしている。

あの健康で元気で明るく強気だった娘が死んでしまったなんて・・・。それも両親より早く四十三才の若さでなんて、信じられない。緩和ケアになって覚悟していたこととはいえ、悲し過ぎる。

私は八才で母が死んだ時にやったように、娘の足に触った。未だ体温が残っていた。

我々夫婦の所に生まれて来てくれてありがとうな。

護ってやる事が出来ずにゴメンな。

闘病を本当によく頑張ったな。天国でゆっくり休んでや。

死亡診断書の死因は肺癌だった。

娘は遺言をメモにしていた。どんな気持ちでこれを書いたのだろう、と思うと、また涙がこみ上げてきた。始めに、「死をこちらから知らせる必要はない」とあったので、親族だけに知らせて、翌日、家族だけの密葬とした。

遺言には「好きなことをさせてくれてありがとう」と最後に記されていた。あれだけ好きに生きたんだもんな。「我が道を行く」ことに徹していた。

死の翌々日、市役所で死亡届等書類手続きをしていると、「安倍元首相襲撃」のとてもない衝撃ニュースがあった。でも、私達にとっては娘の死のことで頭が一杯だった。日本のような治安の良い国で起こったこのニュースは世界的にもショッキングで、アメリカ人の友人や、シリア人の友人から「衝撃を受けた、Mr.Abeの冥福を祈る」メールが何件も来た。

アメリカ人の友人はアサミを知っているので、娘が亡くなった事を告げると、「驚愕した」の言葉と共に丁寧なお悔やみメールが届いた。

我々家族の人生最悲嘆の日々はいつまでも続く。でも娘がこの世からいなくなったとは信じられず、認めたくない。娘の声が出て、パツと出て来てくれるといいのだが・・・、ずーっといつまでも続く醒めやらぬ悪夢の中にいるようだ。

フェイスブックに何か投稿する気は失せ、ましてや友達の投稿に“イイネ”などとする気持ちは全くなかったし、開きもしなくなかった。果たして将来再開する気になれるのだろうか。

娘の遺言、「遺灰の一部はガンジス川に流して」は夫が「やる」と言っ、飛行機荷物だとか税関上等の規制をウェブで調べ出したから必ず果たすことだろう。また夫は、「遺産の内三百万円を

カトマンズの貧困家庭小学生への教育ファンド設立資金に」との遺言も果たす必要がある。

3Dアニメーターの夫は、希望していたカナダの会社に転職が決まり、十月に去って行った。彼には本当にお世話になった。娘は良き夫に恵まれた。彼には新天地の新しい生活で新しい幸せを見つけて欲しい。娘が子供を望まなかったから夫婦は子供を作らなかった。夫唱婦随とは正反対の夫婦だった。新しい生活では子供も作れるよな。

娘の友人達も段々と娘の死を知るようになり、LINE等で連絡をとり合い線香をあげに来てくれる。妻に思い出話を色々と披露してくれて、妻は感謝している。

私は娘の死を親戚や友人達には積極的には連絡していないが、喪に服する関係から一部連絡する必要はあった。ある友人は、「子供に先立たれるのは親の人生にとって最大の不幸だ、心痛を察して余りある、冥福をお祈りします」とのメッセージをくれた。本当にその通りだ。でもその心痛は想像を超えあまりにも大きく経験者でないと決して分からない。

夫の将来を考えると、「子供がいなくて良かった・・・」的なことを言った友人がいたが、それは断じて違う。私達兄妹三人は生母が早くに亡くなったが、こうして育ててもらった。娘に子供がいたら、私達夫婦でだって育てて見せる。

盆に妹と会った時、開口一番「春美さんはアサミちゃんを護ってくれなかったね」とクールに言った。自分の生母を「春美さん」と呼ぶ感覚も感覚だが、娘が死んでしまった兄に向かって、会って最初に言うセリフではないだろう。

しかし、私が当初抱いた感覚（不満）と全く同じだ。妹にとっても愛する姪の早過ぎる死が悔しく、生母が姪を護ってくれなかったと不満に思ったのだろう。

東京にいる妹は、娘が大学生・社会人で東京にいた頃、たまに食事に誘い、「おばあちゃん（春美）が癌で早くに死んでいるから、癌には気を付けな」と注意喚起していたらしい。

妹は生母から受け継いだ涙もろくない性格だから、泣きかけている兄の前で、涙ぐむそぶりは全くない。私は娘を護ってくれなかった父母祖先への悔しさがまたこみ上げてきてしまったのだ。

妻は、「この悲しみはいつまで続くのやろう、苦痛やわ」と言っていて、ネットで災害遺族の会の癒し合うミーティングのようなものを探して参加したりしている。自分の腹を痛めて産んだわけだし、父親より身近に接してきたわけだから、私より悲しみはずっと深いのだろう。最近、妻は私にだけ怒りっぽくなった。娘の死の所為なのは言うまでもない。妻の心のケアが必要だが、山梨でブドウ栽培する生活が主になって、宝塚には頻度多く帰れない私は、妻のケアがうまく出来ない。申し訳ない。妻は老境に入ってきたのに、近所の子供達へのピアノレッスンの仕事に更に没頭している。正に天職だ。

私は更に涙もろくなり、娘との楽しかった思い出が蘇るたび涙ぐむ。『キヤッツ』の Memory（思い出）を聴いても涙ぐむ始末だ。『キヤッツ』は家族がアメリカに赴任したあの時、ブロードウェイで家族一緒に観た。Memoryは哀愁の中にも勇気も与えてくれる素晴らしい曲だ。

世界の何処かで生きていてくれるだけでいいのに、もうこの世に居ないねんな・・・

娘が色紙に「またね！」「またな！」「See you！」と転生めいたことを書いて残したように、私は転生した娘にまた会いたい。
See you again in next life! できればまた親子として。

ふと考えると、娘の性格が生母に酷似していることから、娘は母の生まれ変わりではなかったのか？ 早くに亡くなった母が、私のことが不憫で、私を見守るために娘に生まれ変わった。そうであれば、母は死後二十年で娘に転生したことになる。

娘はどこかで転生して、私が死んだら私はその子供として転生する。そうすると、私は少なくともあと二十年はまだ生きなければ、計算が成り立たない。九十以上まで生きるということだな。そうか解ったよ。俺もいつまでも悲嘆に暮れるのではなく、アサミがそうであったように明るく強く生きて行くよ。

そして、またな！アサミ

(了)